29号
北海道がんセンターたより
平成18年8月発行

独立行政法人国立病院機構　北海道がんセンター
〒003-0804　札幌市白石区菊水4条2丁目3-54　TEL 011-811-9111
ホームページ　http://www.sap-cc.org
編集発行人:山下 幸紀

北海道がんセンターの理念

私たちは、国民の健康で幸福な生活のため、最新の知識と医療技術をもとに、良質で信頼ある医療の提供に努め、特に「がん克服」に寄与することを目指します。　このため、

- 常に、医療の質と技術の向上を目指します。
- 患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します。
- 研究、教育研修を推進し、医療・医学の発展に寄与します。
- 自主自律、創意工夫の精神で病院運営に当たります。

耳鼻咽喉科について

耳鼻咽喉科医長　永橋　立望

北海道がんセンターの耳鼻科では、主に耳鼻科の腫瘍の病気を診ていますが花粉症や難聴などの一般的な耳鼻科疾患も治療しています。もちろん悪性の病気以外でも必要があれば、耳、鼻、のどなどの疾患について手術を行っています。

本年７月から中村成弘先生が研修目的で東京へ転勤となったのに伴ない、市立札幌病院より山田和之先生が赴任し、意欲的に診療しています。声の大きい先生ですので、聞こえの悪い方や軽い症状の方でも気楽に受診してみてください。

耳鼻科の病気の症状は、いろいろあり簡単には説明できませんが、声のかすれ、のどやくびのできもの、などが代表的なものです。舌がんや喉頭がんは、比較的しられていますが、耳鼻科領域（頭頸部）に発生する腫瘍は、良性、悪性含めて頭頸部腫瘍と呼ばれます。それらの部位は、鼻、口腔内、喉頭、咽頭、唾液腺、甲状腺など多岐にわたり、耳鼻咽喉科で専門的な診察を行わないと分からないものが大半です。

当科では、最新式の細い電子ファイバーにて、鼻やのどの奥などの直接診ることができない部分を、痛みが少なく、安全に観察し診断することができます。10年ほど前に比べてこの細い電子ファイバーのおかげで、観察しにくい部分の早期病変の発見が著しく改善してきています。

耳鼻科の病気は、顔などの容貌が関係している事、声や食事など日常生活に必要不可欠な機能が関係している事などで、当科でも以前から、放射線科、形成外科と共同で機能温存の治療に努めています。放射線などで、形態、機能の温存を計ったり、形成外科の手術で失われた機能の改善を目指しています。特に運動神経の麻痺は、機能低下に直結します。当科では、甲状腺腫瘍における発声の運動神経の温存において、術後神経麻痺の発生率は３％程度と良好な結果となっています。

人の聴力は加齢とともに低下していきます。現在、このような加齢性の難聴の全国的調査も当科で行っています。以前より、聞こえが悪いと感じている方や 抗がん剤の治療をうけるにあたり聴力低下が心配の方は、一度、聴力検査を受けることをおすすめします。初回の聴力検査には、30分程度の時間がかかることがありますので、受診日以外に予約制で行うことも可能です。また、若いかたの進行性の難聴の調査も行っていますので、一度受診してみてください。

Contents もくじ

耳鼻咽喉科について ……耳鼻咽喉科医長　永橋　立望……1
医薬品と健康食品について……薬剤科　瀬戸　恵介……2
禁煙外来のお知らせ ……循環器科医師　横山亜由美……3
院内・敷地内全面禁煙のお知らせ ……管理課　庶務班長……3
緩和ケアチームの紹介……がん性疼痛看護認定看護師　武藤記代子……4

医薬品と健康食品について

薬剤科　瀬戸恵介

医薬品は、薬事法（法律）で定められた品質・有効性及び安全性に関する調査が行われ、厚生労働省から効能・効果に関する承認をうけています。医薬品には、医師が患者さまの症状を診て処方する医療用医薬品と、薬局・薬店で購入できる一般用医薬品（大衆薬）があります。一方、健康食品にも、なんらかの成分が含まれていますが、それら成分の有効性が立証されているものはほとんどありません。もちろん、副作用についても検討されていません。食品の中には、医薬品の効果・副作用の発現が強くなる、効果が弱くなるなど、医薬品と相互作用を起こすものも数多くあります。

従って、現段階では、医薬品と健康食品を併用することによって有害な作用が起こる可能性を否定できません。

治療中は、主治医の許可を得た健康食品以外摂取しないようにして下さい。

気になる健康食品があれば、**購入前に**まず医療スタッフへご相談ください。

すでに摂取されている方は、必ず報告して下さい。

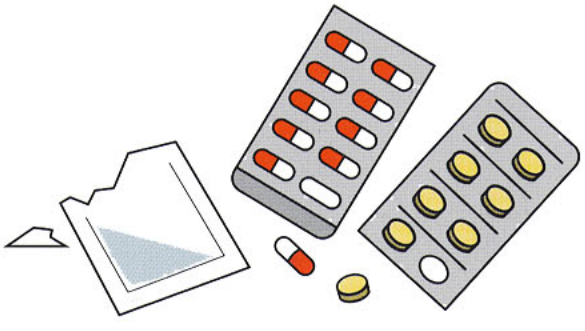
昨今ニュースなどで取り上げられている誇大広告について

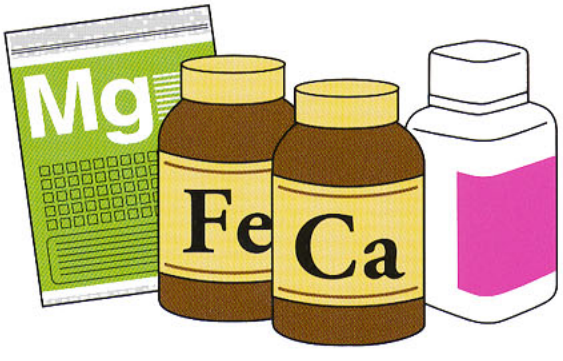
「天然」「食品だから安全」「全く副作用がない」「免疫力アップ」などの売り言葉

天然、自然の物でもからだに悪い物を含む場合があります。健康食品には、特定の成分を必要以上に濃縮している物があり、それを摂取することによって有害な作用を引き起こす可能性もあり、必ずしも安全とは言えません。また、仮に免疫力がアップしたとしても、逆に病状が悪化してしまうような疾患もありますし、免疫を抑えることで効果を発揮する医薬品もあります。

「病気が治った」などの体験談、「専門家によるお墨付き」などのフレーズ

健康食品は医薬品ではないので、こうした言葉は信じないようにしましょう。飲んでも治らなかった人のほうが圧倒的に多数です。症状などが良くなって健康食品のおかげと体験者がはっきりと書いていても、同時に行われた治療や、日頃の生活の改善などによって良くなった可能性があります。また、作り話の可能性もあります。あるいは、依頼を受けた業者と関係が深い専門家がいることもあるかもしれません。効能、効果を記載できるのは医薬品のみです。言葉巧みに効果がありそうな表示をし、高額で販売されている健康食品が多数見受けられます。





禁煙外来のお知らせ

循環器科医師　横山　亜由美

本年から禁煙外来が始まりました。タバコには数多くの有害な物質が含まれており肺がんをはじめとるする様々な疾患の原因となります。心筋梗塞や狭心症のリスクも高めます。また、タバコは吸っている本人だけではなくタバコを吸わない周囲の人々の健康をも蝕みます。

当院ではタバコをなかなかやめられない方の相談、ニコチン貼付剤（院外処方）を使用した禁煙の指導を行っています。６月からはすぐに禁煙したい外来患者さまを対象に保険診療ができるようになり、ニコチン貼付剤の薬代にも保険が適応となりました。ただし、ニコチンの依存度などによっては自由診療（料金は全額自己負担）となる場合もあります。

毎週水曜日の午後、当院循環器外来で行っています。完全予約制となっておりますのでお申込みは1階受付カウンター、もしくはお電話でお願いします。

（011-811-9117 医療連携室直通です。）

院内・敷地内全面禁煙のお知らせ

管理課　庶務班長

７月18日（火）より院内・敷地内が全面禁煙となりました。

みなさまのご協力をお願いします。

緩和ケアチームの紹介

がん性疼痛看護認定看護師　武藤　記代子

緩和ケアという言葉を最近テレビなどでも多く放送されるようになり、耳にされた事もあると思います。緩和ケアとは、何かということからお話します。緩和ケアとは、がん患者さまの身体的な痛みだけでなく、病状への不安などの精神的な痛み、職場のこと・家族のこと・収入のことなどといった社会的な痛み、自分の存在価値を見出せなくなるスピリチュアル（霊的）な痛みなど、いろいろな要素によって形成される痛みに対応していくケアのことです。このような痛みは“がん”と診断された時から発生しています。WHO（世界保健機構）で「緩和ケアは、がんの治療と並行して行われるべきである」と強調されています。緩和ケアは、がんの治療ができなくなってから行うものではありません。さまざまな痛みを少しでも楽にして積極的に治療や生活を過ごせるように支援することです。

当院でも平成18年４月より緩和ケアチームとしての活動を始めました。チームの主要なメンバーは、体の症状をコントロールする麻酔科医師・薬剤師・がん性疼痛看護認定看護師です。主治医より依頼を受けて、患者様のところに伺い、患者さま・ご家族の希望を聞き、希望にそったケアの進め方を相談していきます。毎週月曜日には、チーム全体で話し合いケアの進め方など検討しています。緩和ケアチームのメンバーが定期的に患者さまのお部屋を訪問し状況をお伺いすると共にチームで患者様やご家族のケアや治療について話し合いを行っています。

緩和ケアをご希望の方は、主治医または病棟看護師にご相談ください。